

# Newsletter

July 2006

<http://www.aack.or.jp>

目次

|                  |             |
|------------------|-------------|
| アフリカ縦断の旅 第二部     | 田中二郎 …… 1   |
| AAACK人物抄         |             |
| 奥貞雄さん（一九〇七〜一九八七） | 平井一正 …… 7   |
| 知床岬↓知床岳巖冬期初縦走    |             |
| —私の『世界最悪の旅』—     | 中島道郎 …… 9   |
| 剣一周パノラマコース       | 高尾文雄 …… 11  |
| 日本オートルート報告       | 川久保忠通 …… 14 |
| 図書紹介             |             |
| 「京大探検部」          | 高村奉樹 …… 17  |
| 「快樂登山のすすめ」       | 阪本公一 …… 20  |
| 事務局報告            | …… 21       |
| 会員動向             | …… 22       |
| お知らせ             | …… 23       |
| 編集後記             | …… 24       |

## アフリカ縦断の旅 第二部

田中二郎

### エトーシャ国立公園

オヴァンボランドの南に隣接して、エトーシャ国立公園がある。ナミビア最大の国立公園であるが、この特徴は、全体のほぼ四分の一の面積を占めるエトーシャ・パンを擁することである。普段は干上がったひび割れの土が露出するこの平らな窪地は、夏の雨季に大雨が降ると、水はアンゴラ方面からオヴァンボランドを水浸しにし、さらに南下してエトーシャ・パンへと流入し、広大な湖へと変貌させる。周囲のサヴァンナは、モパネ林、アカシアの散在する草原に分けられ、ライオン、豹、チーター、ハイエナなどの肉食動物とともに、象、キリン、シマウマ、各種のアンテロープなどたいていの動物が見られ、観光のメッカと



世界最大規模の国立公園の1つ、エトーシャ国立公園。シマウマの群れの中で草を食むキリン。背が高く首の長いキリンはアカシアの木の葉を食べるのは得意であるが、地面の草を食べたり、水を飲んだりするには苦勞する。

なっている。東側のゲートから入場した私たちは、ゲートのすぐ近くにあるナムトリー二のバンガローに落ち着いた。夕方のひととき、目の前の池のほとりの見晴台に大勢の人だかりがしているのに惹かれて行ってみると、池の対岸には二頭の雌ライオンが悠然と寝そべっていた。すでに狩りを終えて夕食を済ませたのか、あるいはこれから連れ立って狩りに出かけるのであろうか。薄暗くなってきたので、私鏡でもよく見えなくなったので、私

たちも引き返し、レストランへ晩飯を食べにいった。

翌日は朝食後公園内の見物に出かけ、昼ご飯のサンドイッチを食べて帰ろうとする、ズッパさんたちの車の屋根に異音が生じ、停まって点検する。なんと屋根に取り付けたルーフキャリアのネジが緩んで、ガタガタと大きな音を立てていたのである。プライヤーとスパナでネジを締め付け、私たちのできるだけのことはしたのだが、車体のフレームにカシめて留めてあったピンがはずれて、鉄板の支えが一本なくなっていた。これは素人には修理はむずかしい。宿舎の近くのガレージに持ち込んでメカに修理を依頼する。私たちがいつもカラハリの調査に使っているルーフキャリアと違って、今度借りてきたものは、スキーラックに毛の生えたようなちやちやな代物で、これに重いスペアタイヤ、ガスボンベ、ガソリン二〇リットル入りのジェリー缶を積んでいるので、かなりの無理があったのだろう。しかし、荷台に余分のスペースがないので、今後休憩のたびにスパナでネジの緩みを締めまじししながら注意して走るしか仕方がない。

### カラハリ砂漠へ

エトーシャから幹線道路を一気に南下し、首都ウインドフックで二泊休養とする。トヨタのディーラーでガラス屋を教えてもらって、窓ガラスを純正品に入れ替えてもらう。急ブレーキをかけたときに、ガタのきたルーフキャリアが前方へ吹っ飛んで落ちてこないように、荷造り用ベルトを買ってきて、後方

へしつかりと引つ張って縛りつける。あとは、首都の中心部を買い物がてら見物し、ゆつくりと骨休めをする。

九月二三日、今日はボツワナ国境に向かって東へ三〇〇キロ、国境を越えてからさらに二五〇キロのカラハリの町ハンシーに着いてガソリンを補給、最後に未舗装の道を一〇〇キロ走って、私や丸山の調査地ニューカデに到着した。

昔はジンバブエ、南アフリカを含め南部アフリカ一円に分布していたブッシュマンは、一五世紀以来の黒人バントウの南下と一七世紀以降のヨーロッパ人のケープからの北上によって駆逐、同化され、いまではナミビア北東部からボツワナ西部にかけてのカラハリ砂漠のみ、一〇万人ほどが残っているにすぎない。しかも、いずれのブッシュマンも、政府の近代化政策のもと、定住化を余儀なくされ、従来の狩猟採集生活を放棄し、生活様式を変えざるをえない状況におちいつている。

私たちの研究対象であるニューカデの人々も、一九九七年に半強制的に本来の彼らの居住地、中央カラハリ動物保護区の中のカデ地域から、一〇〇キロほど離れた保護区外へと移住させられた。三〇人から五〇人ていどのグループで頻繁に移動しながら狩猟と採集の暮らしを送っていた人々が、いまニューカデの定住地で一千人を超える大集落の一員となつて暮らすとき、生活も社会も大きく変わらざるをえないことは容易にお分かりであろう。動物は大集落の近くには寄りつかないし、



カラハリ砂漠のブッシュマン。母子がくつろいでいる。授乳は2才ぐらいまで続けられ、毒蛇やサソリなど危険の多い環境の中で、赤ちゃんはつねに母親の庇護のもとに過ごす。

採集すべき有用植物もあつという間に採りつくされた。政府は牛とヤギを提供し、トウモロコシ栽培を奨励したが、少数の家畜と、わずかばかりの降雨のためあまり収量の期待できない農業では、安定した生活は望むべくもない。定期的な食料配給と年金により、人々はなんとか食いつないでいるが、こうした依存的な暮らしは、けつして人々を自立的、意欲的な望ましい生活へと導いていくことはいである。

見知らぬ大勢の人々との生活を嫌って、集落から一〇キロも離れて、ブッシュの中に小屋を建て、相変わらず畏れやトビウサギ猫をして暮らす人たちが、何グループかいる。もちろん彼らとて、水は集落までロバで汲みに行き、配給の日にはちゃっかりと出かけていって食料を受け取ってくる。私たちはそうし

たグループの一つの所へ行き、テントを張って泊まることにした。

今回の旅行ではじめてテントを張るのであるが、私の運転する車の屋根から引き摺り下ろした四張りのテントのうち、二つはほとんどない代物であった。車と一緒にレンタルしてきたもののだが、私たち夫婦が使ったテントはメッシュのもので、その上から掛けるべきフライシートが見当たらない。また、ズッパさんと藤岡君が使ったものは、六人用ぐらいで大きさは十分すぎるほどであったのだが、ポールの長さが合わなくて、きちんと張ることができなかつた。借りる時にちゃんと試し張りをしておけばよかつたのだが、あのときは、借りるべき細々としたものが多く、また手続きにも手間をとって、とても余裕がなかつたのである。乾季の真つ最中のカラハリでは雨の心配はまったくなく、ともかくも二晩を過ごすにそれほど困ることではなかつたのが幸いだった。

翌日は、二人のハンターを伴って、彼らの罾の見まわりに出かけた。三キロほど車でブッシュの中を掻き分けて進み、木が立て込んでいたので車を捨て、さらに徒歩で三キロほど歩いただろうか、二人分の二〇個ばかりの罾を見てまわつたが、残念ながら今日の収穫は皆無だった。これだけの数の罾をかけておけば、ステインボックス（一〇キロぐらいの中型アンテロープ）の二頭ぐらいは獲れることが多いのだが、やはり獲物が少なくなつていくのかもしれない。

獲物がなないので、ヤギを一頭買って、皆で

食べることにした。われわれ八人ならほんの少しあれば足りるのだが、四分の三以上はこのキャンプの住人へのプレゼントである。あばらのところをばっさりと切り取って、焚き火の熾きの上でじんわりと焼く。塩コショウかマスタードに醤油をつけるか、久し振りのアフリカの味を楽しんだ。

ここで二泊したのち、動物保護区の中の昔の住みかを訪れる予定を立てていたのだが、ここから保護区へ入るゲートはごく最近になつて閉鎖されたことを聞かされた。では仕方がない、予定を一日早めてマウンの町で二泊し、ゆっくり休養をとることにしよう。暑いカラハリのテント生活は慣れない人にはなかなか大変な経験だつたからである。

### ビクトリア・フォールへの道

カラハリ砂漠の東縁を北上したりビンググストンは、ザンベジ川に差しかかつて、大きな瀑布を発見し、これにビクトリア・フォールの名を与えた。幅一七〇メートル、落差一八メートルにもおよぶナイアガラに次ぐ世界第二の滝であり、いまや一大観光地となつて、世界中からの客が引きをきらない。

私たちは、マウンから東にナタへと向かい、そこで北上してザンベジ河畔のカサネまで六〇〇キロの道を一気に突っ走つた。カサネはチョーベ川がザンベジ川本流に合流する地点にあり、象の大群で有名なチョーベ国立公園の入り口にあたる観光基地である。しかし、私たちは、一〇月一日にタンザニアのアルーシヤからチンパンジー研究基地として名高

いマハレ国立公園まで、チャーター飛行機を予約してあるので、ここでゆっくりしている暇はない。二週間のうちに長い旅を経てアルーシヤにたどり着く必要があつた。

ビクトリア・フォールはカサネから約七〇キロメートル下流に位置するが、そこに達するルートは二つある。ザンベジ川の右岸を下つて、一旦ジンバブエの国境を越え、ザンベジ川にかかるザンビアとの国境の橋を渡り、リビンググストンの町に達するか、あるいは、カサネのすぐ近くのカズンガラでザンベジ川をフェリーで渡り、直接ザンビアに入国して、左岸沿いにリビンググストンに至るかである。ビクトリア・フォールはジンバブエ、ザンビアのいずれ側からでも容易に見ること



ボツワナからザンビア向け、ザンベジ川をフェリーで渡る。両国の首都ハポローネとルサカを結ぶハイウェイバスも最近運行されるようになった。およそ70キロ下流にビクトリア滝がある。(撮影：笹谷哲也)

ができる。ホテルのマネージャーに聞いてみると、ジンバブウェを経由するには多額の車両輸入税をとられるうえ、二回国境を越えるのに時間のロスも大きいから、フェリーでザンビアへ真っすぐ行くのが絶対得策だと教えてくれた。道路はいずれもたいへんよく整備されているというので、私たちはマネージャーの助言に従って、カズングラからフェリーでザンビアに渡る。

リビングストンのホテルにチェックインしたのち、私たちは国境の橋の側の駐車場に車を乗り捨て、遊歩道を滝に向かって散策する。ヒヒの群れが人懐っこくわれわれを眺めているが、サヴァンナのギャングといわれるこの猿たちはここでは観光客なれしていて、全くおとなしく、悪さをする気配はなかった。一キロ以上の幅をもつザンベジ川を一望することとはできず、ゴルジュの突端から見えるのは一〇〇メートルを超える落差の滝のごく一部だけである。残念ながらもいまは渇水期で、流れ落ちる水の量はそれほどでもないが、大きく切れ落ちた断層崖の自然の所作は、見る人の目を圧倒する。水しぶきには午後の日を浴びて大きな虹がかかっている。雨季の水かさが増したときには、滝の水は壮大に流れ落ち、対岸の小径を歩いていても合羽か傘が必要なくらい水しぶきが降りかかってくるのである。

### 悪路のはじまり

カズングラのフェリーポートへの分岐点に引き返し、ザンベジ川沿いに北上してモングに向かう。セシェケで立派な橋を右岸に渡っ

たところまで舗装が続き、一時間ほどで快調に飛ばすが、さて舗装が切れた途端、道はひどいことになる。ところどころに岩が露出し、そうかと思うと深い砂道になる。凸凹のひどさはもちろんのことである。四輪駆動を駆使し、時速二、三〇キロ、ときには歩くぐらいのスピードしか出すことができない。雨季になつて泥道がぬかるんだら、とんでもないことになるだろう。コンゴ森林の中の道に匹敵するのではないか。村尾さんの調査地であるセナンガまでの二〇〇キロ強はおそらくアフリカでも最もひどい悪路の一つであることは間違いない。

セナンガの少し手前に渡し場があり、小型のフェリーで左岸に渡り返す。私たちが渡つた直後に軍隊の団が到着したが、もう少し遅れていたら、あちらの軍用トラックなどが優先的にフェリーを使うに決まっているから、歯噛みしながら一時間ぐらいは待たされていたにちがいない。よいタイミングで渡し場を越えることができた。

セナンガに着いてようやく舗装道路が現れほつとする。セナンガの小さなホテルに着いたのは六時前でもう既に夕暮れが近い。ズッパさんはウイスキーの水割りを飲むのに氷が欲しいとわめくが、田舎に来れば氷はちよつと手に入る見込みがない。

翌三〇日、一〇キロほど北へ走つたところに村尾さんが調査している村があり、一時間ばかり見学していく。村尾さんは村長の親戚の人に世話になっており、小さな家を建ててもらって住んでいる。奥さんの手厚いもてな



アンゴラから移住してきて、ザンビアの西端ザンベジ川左岸のセナンガに住みついた人々。村尾さんが調査している村のオバサンと近所の子どもたち。(撮影：笹谷哲也)

しを受け、村内の一部を見せてもらう。カハラリ・サンドの細かい砂粒の土地でキャッサバやトウジンビエを栽培する村人たちの農耕生活を、農学部出身の村尾さんは克明に観察し、分析しつつある。

ここから二〇〇キロあまり北にザンビア北部州の州都モングがある。モングの町からはセナンガを南限にして広がるザンベジ川の氾濫原が一望できる。氾濫原は毎年雨季になると氾濫して大きな水溜りを形成すること有名である。またロジ王国の王宮がおかれていた。ロジ族の人々はこの肥沃な氾濫原を利用して、農耕と牧畜、漁労の生活を送っている。ロジの王様たちは、乾季のいまは氾濫原の方に住んでいるが、雨季になり、下方が水浸しになると丘の上の王宮に遷都する。クオンボ

カと呼ばれるこの一大行事はいまや世界的な観光イベントとなっていて、遷都が行われる日には多くの人々が見物に押し寄せるといわれる。

### ガソリン危機

モンゲでガソリンが入手できるかどうか、私たちは心配していたのだが、村尾さんがなにかと世話になっているJICAの方のご尽力もあって、無事満タンにすることができ、六四〇キロを走ってルサカに到着する。月が替わって、一〇月一日となっていた。

ザンビアの首都ルサカでガソリンがなくなるとは予想だにしていなかった。ちょうどわれわれが着く直前から、この非常事態は始まったようである。街中にたくさんあるガソリン・スタンドのどこもかしこもが長蛇の列であつた。わずかばかりのストックを小出しにして売っているのを、みな延々と行列をつくって、運のよい人はいくばくかのガソリンを補給していく。このところの原油の高騰で、ザンビアでもガソリンを値上げしたいのだが、一気に三割も値上げすれば、暴動が起きかねないので、このガス欠は値上げ前の前哨戦だつたようである。ズッパさんと私は二台の車で列の最後尾に並び、一日には夜九時から一時まで、結局その日は埒が明かす給油停止。翌二日は朝五時から再び並びなおすが、いつまで待っても給油が始まらない。タンクローリーがこちらに向かっているとの情報も入るが、本当のことなのかどうかも不明である。ポリタンクをいくつも並べて先頭に並ぶ男がプレミアム付きで買わないかと申し出て

くるのにOKを出し、それを期待する。定価一リットル七千クワツチャのガソリンが闇値はすでに一万クワツチャに値上がりしている。

八時ごろになって、ベベさんが歩いて五分ほどのホテルから駆けつけてきた。「オーイ、ホテルでガソリンが手に入ったぞ。急いで引き返せ」、よく事情はわからないままに車を連ねてホテルに引き返す。ホテルの裏手にまわりこんで、ホテル専用のガソリン・タンクのところまで導かれていく。ルサカで最高級のインターコンチネンタル・ホテルに投宿したのが大正解だつたのだ。何をどうネゴシエートしたのかは知らないが、英語が堪能で、口八丁のベベちゃんが、マネージャーを捉まえて、まくし立て、われわれの苦境を訴えたところ、各車五〇リットルずつ、計一〇〇リットルを市価で譲ってくれることになつたのである。これで明日は安心してマラウイへ向かつて出発できることになつた。

### マラウイ湖畔

ルサカから東へおよそ六〇〇キロ、マラウイとの国境の町チパタの安宿に一泊する。途中モザンビークとの国境に接する付近ではポリス・チェックがあつた。密入国や密輸を警戒しているのであらう。ここまでくればガソリンはふんだんに出まわっており、一安心だ。翌四日早朝に通関を済ませ、首都リロンゲエまではひとっ走り、昼前に到着する。午後はのんびりと休養するが、若い三人の男女はなにか役に立つ本でもないかと町へ探しに出か

けていった。

一〇月五日、リロンゲエからマラウイ湖に向かってさらに東へサリマへと進み、ここから北に向かって湖岸に達する。湖を右手に遠望しながら、リロンゲエから五六五キロで目的地のンカタベイに到達する。六日は一日ゆつくりとこの保養地で骨休めだ。沖合いに見える小島が釣りのポイントだといふので、わたしと藤岡、村尾の三人でホテルのボートを出してもらって釣りに行く。丸山さんは熱を出して今日は用心をして休養、ベベさん、アサミさん、ズッパさん、妻の憲子もまたホテルの庭でのんびりしていたといふ。

シュノーケルをつけて水中を覗いてみると、小魚が結構泳ぎまわっているが、藤岡君も私も釣果はまったくゼロだつた。村尾さんはひとり島のまわりを泳ぎまわってはしゃい



マラウイ湖畔の市場。野菜、豆、湖で獲れた魚の干物を並べて売っている。(撮影：笹谷哲也)

でいる。近くに二隻の小船がやってきて、連携をとりながら網を流している。見ていてもそれほど魚は獲れていないようだった。お昼になったので、ボートでホテルまで送り返してもらおう。

午後はマンゴーのまだ熟れていない緑色の実が鈴なりになった芝生の庭と砂浜を散策し、のんびりと昼寝を楽しむ。丸山と村尾は、この付近の村を調査している同僚から、ユスリカを団子にしたものがマラウイ湖の名物でおいしいから是非食べてくるようにと聞いてきたので、探していくが、見つからなかったといって戻ってきた。マラウイは、農業と漁業以外に産業はなく、けっして豊かな国ではないが、湖も田舎の土地も人々もじつに平和でのかな国である。街道沿いはきれいに耕されていて、まるで日本の農村を思い起こさせる。アフリカ大地溝帯の最南端に位置するマラウイ湖は南北に細長い大きな湖で、この国の三分の一を占めているが、東半分はその南部がモザンビーク領、北部がタンザニア領に属している。地雷の脅威に怯えなければならぬモザンビークと違って、じつくりとアフリカの原野を楽しまたい旅人にはマラウイはまことにうってつけのところだと思われた。

## タンザニアへの旅

一〇月七日、ンカタベイからさらに湖岸沿いの道を北上し、タンザニアとの国境を越える。約四六〇キロの走行で、ムベアの町に日が暮れてから辿りつく。タンザニア最南端に位置するこの近辺には、農耕民の村を調査す

るアフリカセンターの教員、院生が何人か調査に通っているが、いまは誰もいないので、町のホテルに一泊しただけで、モロゴロに向かつて東北東へと進路をとる。

マラウイに比べるとタンザニアは圧倒的に人口が多く、街道沿いに次々と村があらわれ、道に行く人々の数も多い。自転車の多さもやたら目につく。道路は舗装されていてそれほど悪くはないが、閉口するのは、車がスピードを出さないように、やたらと道路を横切つてアスファルトのバンブが拵えてあることだ。村の前には必ずこの障害が設けてあり、ひどいものは停止寸前まで速度を落とさないと、下手に突っ込んだら車は大ジャンプし、天井に頭をぶつけるぐらい大きなバンブもある。建設省がきちんと作ったものに加えて、村人たちが勝手に自衛のために手作りしたものも多く、中には障害物の手前に予告の標識がなく、突然現れて急ブレーキをかけなければならぬところもある。

イリンガを過ぎて峠道を下っていくと、道路の両側の斜面に見事なバオバブの純林が現れる。この林は何キロ続いたことだろうか。これだけの美しいバオバブの林はちよつとお目にかかったことがない。まるでおとぎの国を訪れた気持ちになる。あそこで、なぜ車をとめて写真を撮っておかなかったのだろうか。いまになって大層悔やまれるのである。

やがて、ミクミ国立公園の入り口にさしかかり、公園とは反対の右手の丘に建つサファリ・ロッジに到着した。酒をたしなめつつ、夕食を楽しくすませたあと、男連中四人で寝

酒にウイスキーの水割りを頼み、わいわいやがやおしゃべりをした。旅は半ばを過ぎ、来し方を思い出し、行く手の冒険を楽しく思いつめぐらした。ベベちゃんとは早々に引きあげたが、ズッパさんと藤岡君はさらに杯を重ねたようである。二人は酔っ払って、自分たちの部屋までたどり着くことができず、途中の木陰でひっくり返ってしまった。村尾さんが心配して、「わたしや、ここで寝る」という二人をなだめずかして部屋まで引っ張っていったということを、私たちは翌朝聞いた。

翌日は朝のうちにミクミ国立公園の中を一巡りし、モロゴロへ向かう。午後の早い時間に町についたので、まずはガソリンを満タンにしていると、「ハロー、ハロー」と寄ってきた人がいた。以前にアフリカセンターへ留学生として勉強にきていたムスヤさんであった。彼はモロゴロにあるソコイネ農業大学の講師をしており、たまたま私たちを見つけたので、ガソリン・スタンドまで追っかけてきてくれたのである。夕方には、やはりセンターで博士の学位をとり、ソコイネの講師をしているニンディさんが小学生の息子を連れてやってきて、夕食をともに賑やかに歓談した。ソコイネをベースにして、いまセンターの助手である荒木美奈子さんが彼女のフィールドで調査を行っているが、山の上の調査地から丸山さんの携帯へねぎらいの電話をしてきてくれた。ソコイネ農業大学と京大のアフリカセンターは研究協力協定を結んで共同研究を進めており、いまは過去五年以上前から、掛谷誠教授が代表者となって、JICAプロジ

エクトを進めている。

(第二部 完)

## 訂正

前号No.38に掲載された(第一部)中七八ページに記載した石化木を珪化木と訂正いたします。

## AACK人物抄

### 奥貞雄さん(一九〇七〜一九八七)

平井正二



ここで紹介する奥貞雄さん(以下敬称略)は、今西錦司や西堀栄三郎らが活躍した三高山岳部黄金時代に活躍したひとり、特に今西がかかわった二回の遭難事件のときのメンバーでもある。AACKのK2計画で、伊藤愿を交渉のためにインドに派遣するとき、田中喜左衛門とともにスポンサーの一人として名を連ねている。白頭山遠征の隊員であったが、以後第一線から退いている。

#### 一、京都一中から三高へ

奥は一九〇七年(明治四〇年)三月一〇日、九人兄弟の八番目として生まれた。七男二女

というので当時としても子宝に恵まれた家庭であった。父は奥繁三郎といい、帝国議会貴族院議長を一九一四年三月〜同年二月、一九二〇年六月〜一九二三年二月の二回つとめている。最初のときは(大正三年)、シーメンス事件の収拾に手腕を発揮した。また繁三郎は京都ガス、京津電軌などの会社を設立して社長となり、また関西大学創始者のひとりでもあった。奥の家系は政治に関係が深く、長男主一郎も貴族院議員で鳩山一郎とも親交があった。奥の家は八幡市の出身で、石清水八幡宮の宮司をしていたこともある。神道の出である。

奥は柳池小学校を経て京都一中に進んだ。一中では湯川秀樹と同期であった。奥の京都の家は御幸町二条の今は柘屋別館となつているところにあつた。そこから奥は京都一中に通っていた。柘屋になつたのは昭和二八、九年頃という。

一九二四年奥は三高へと進む。三高山岳部では今西より二年下で、酒戸、細野らと同期である。奥は男の子の末っ子で特に三男の幸三郎はかわいがつた。ボウヤ、ボクちゃんなどとよばれていてボンコという名になつた。このあた名は山岳部でも継承され、後輩は敬意をこめてボンコハンともいう。

#### 二、登山活動

三高山岳部では、二年上の今西、西堀、高橋ら、また同期の酒戸、細野などいい山仲間

に恵まれ、多くの山行きをこなしている。三高山岳部報告四号から彼の山行きを拾つ

てみる。

一九二五年(大正一四年)二月、高橋、細野らと火打、黒姫、四月、多田と立山、剣スキ、七月、有峰より双六、薬師、槍、穂高、さらに今西、西堀らと西沢峠から樺島をへて赤石岳へと山行きを重ねる。このとき田中喜左衛門も同行している。

特記すべきは二〇月一四日、今西、西堀、奥、相良貞直の四名が五千尺からジャンダルムへの新しい登攀ルートを開いたことで、穂高岳川畳岩初登攀として知られている。

一九二六年三月、西堀、今西、多田、渡辺、酒戸、細野らとともに春の黒部東沢に入った。このとき黒岳はじめ、赤牛岳、野口五郎岳などの積雪期初登頂に成功していることは、前回の細野重雄の稿で述べた。

一九二七年京大法学部に入學  
京大に入ってから活躍は続く。一九二九年七月、高橋健治、酒戸、奥、細野、竹沢長衛らは、はじめて北岳バットレスの全貌を登山界に紹介した。これは登山史上大きな業績を占めている。

卒業後、後述するように奥はヨーロッパに行き、高橋らとアルプスでスキーや岩登りをした。新しい登山装備を京都に送っている。

帰国後、一九三二年一月、蔵平で高橋とともに、三高山岳部員に本場のアルペルグスキー術の講習をしている。

そしてその後に行われた今西錦司を隊長とする白頭山遠征(一九三三〜三四年)に参加、第一次頂上攻撃隊のリーダーとして、白頭山最高点大正峰(二七四三m)に立った。

当然ヒマラヤを視野にいれていたと思うが、以後奥は表舞台に立たなかった。

### 三、二つの遭難事件

三高山岳部において奥は二回の遭難事件に遭遇しており、九死に一生を得ている。そのときの詳細を三高山岳部報告から再録してみよう。

#### (一) 横山岳の遭難

一九二六年(大正一五年)一月一〇日、今西、酒戸、奥、相良の四名は、滋賀県の横山岳一三二mを目指した。鳥越峠から尾根をたどる。気温が上昇して雪がボール状になる。峠に一時、天候わるくなり、一〇〇〇m付近で引き返す、酒戸、相良、奥、今西の順。コエチ谷を下がる。五時三〇分頃雪崩発生、酒戸は埋まらなかった、今西は埋まったがすぐ脱出、相良は首まで埋まった。奥は滑走中、スキーを進路にむけたまま、谷川に倒れ、倒れるとすぐ埋没、行方不明になる。積雪二尺、かやの斜面で積雪はよくしまっていた。

今西は杉野部落に救援に走った。段々畑をスキーでジャンプしながら、貴族院議長の息子が遭難したと叫び、村人に救援を求めた。村では消防団、青年団が召集された。

午後八時、九時になっても見つからず、捜索中止も考えられた九時半、帽子のひもから奥を六尺下から掘り出すことに成功した。呼吸、脈拍、ともに正常、しばらくして意識を回復した。

掘り出したときは滑走そのままの姿勢で、上体をやや起こしてv字型になり、左手は谷

右手は山側に伸ばしていた。四時間も雪の下になっていて助かったのは幸運であった。

当時の新聞のスクラップが三高山岳部のルーム日誌にある。その見出しは大きく、「スキー場の大雪崩で学生四名谷底へ、埋没されて生命危篤、遭難学生は京大三高の優秀なスキー家」とあり、さらに記事の中で、「今西錦司は京都西陣織りの一粒種できびしくスキーは禁止されていた、また奥貞雄は元政友会の大立て者である奥繁三郎の令息である」と報じている。

#### (二) 前穂高の遭難

同じ一九二六年の夏、七月二日、今西、酒戸、奥、井上金三、上林明、の五名は奥又白谷から前穂高北尾根四、五のゴルに登った。午後二時少し前にゴルについたときは小雨が降っていた。深いガスの中、涸沢側にグリセードをしているときに、事件は起こった。酒戸と奥が先に滑った。続いて上林と井上が滑ったがほとんど同時に滑落し、クレバスに転落、酒戸がクレバスをのぞいて遭難を知ったとき、後続の今西も滑落しクレバスに転落した。奥は無事であった。奥は書いている。「振り返った瞬間、ああそれが何とおそろしい瞬間だったろう！上林続いてまた井上が滑るか否かに転倒して稲妻の如く滑り落ち霧の中に姿を没した。」

酒戸は四時二〇分、上高地に救援を求めて走った。奥はクレバスに転落している三人を介抱する。雨がはげしく、風も出てきた。午前二時酒戸が人夫と到着。しかし悪天候と闇のため救出は夜明けになった。上林は大丈夫

だが、今西は意識が不明瞭、井上は死亡した。「後から考えれば、あのときもう一時間おろすのがおくれたらならば、もうひとり山友達をうしなうところだった」と奥は書いている。

ちなみに奥又白から北尾根に達したのはこれが最初の記録である。また穂高における最初の遭難でもある。(三高山岳部報告第五号)

#### 四、ヨーロッパへ遊学

一九三〇年、京都大学法学部を卒業する。祖父の遺産があり、就職はしないで、ヨーロッパに遊学。(昭和五年は未曾有の就職難の時代であった。)三番目の兄幸三郎がパリにいたので、ここを拠点として数年間スイスなどに遊学している。幸三郎は藤田嗣司のパトロンもしていた。奥は当時パリにいた藤浦悦など日本人と親交があった。

同じ一九三〇年に渡欧した高橋とともに、奥は多くのヨーロッパを登った。トーテンキルヘル、グロスゲロックナー七峰、ユングフラウ、ブライトホルンなど、一九三一年にはマッターホルン(ガイドなし)、モンテローザなどに足跡を残している。しかし一九三二年スイスのサントアントンでスキーをしていて骨折し、三ヶ月入院した。このとき手術のミスか両足の長さが二、三センチ違った。このおかげで兵役を免れる。

#### 五、結婚そして晩年

一九三七年(昭和十二年)、結婚。このとき夫人方から結婚後は登山をやめるといふ条



件があり、以後奥は山登りをしていない。

夫人の父は井口竹次郎といい、第四代大阪ガスの社長、三井物産会長もつとめたこともある。戦後、彼のすすめもあり、奥は近畿コースを経て大阪ガスに勤務し、後に監査役になった。因みに奥のゴルフの腕はシングルである。

奥夫婦は二男二女に恵まれた。奥がスイスの山で羚羊を見て、娘のひとりには羚羊に困んだ名前をつけようと決心した。末っ子の浅山羚羊さんの名前の由来である。

私はチヨゴリザから帰ったときのAACR総会で、桑原先生から奥に紹介されたことを覚えていた。ただ一回の出会いであったが精神な顔つきが印象に残った。

奥は晩年骨折をはじめ、いろいろな病気に悩まされた。そして一九八七年九月二八日、肺炎のために亡くなられた。日本山岳会京都支部が創設され、奥も会員であった。支部の計報第一号でもあった。

この稿をまとめるに当たって、浅山羚羊さんにはいろいろと教示いただいた、四手井靖彦さんには浅山さんを紹介していただいた。以上の各位に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

今西錦司編 ヒマラヤへの道、中央公論社、

昭和六三年

長谷川清三郎 「ボンコ」さん（奥貞雄氏）

を想う、山、五一八号、一九八八年八月

## 知床岬↓知床岳巖冬期初縦走

— 私の『世界最悪の旅』 —

中島道郎

畏友斎藤惇生君の『知床遠征』の補足として、蛇足ながら、『岬隊（藤村良へオンタイン・脇坂誠へザッカス・私）』のことを付け加えさせて頂きたい。

あれは、もうこんな目には、金輪際、二度と再び遭いたくないと思つたほど過酷な山旅であった。その酷さは文字通り「筆舌に尽くし難」く、かのチェリー・ガラードの『世界最悪の旅』と雖も、ここまで酷くはなかったのではあるまいか、とすら思つたくらいであった。すなわち、彼が味わつた困難さは、南極の猛烈な寒さと強風だけで、進路は固くて平坦だったろうと想像するが、我々の場合は、極寒・強風（零下三〇度、風速二〇米）の上に、山腹一面の這松の藪と、それに積つた雪との格闘が加わっていた。我が行く雪原は、実は、身の丈を遙に越える這松の藪の上に積つた数十センチの雪の層で作られた不安定な雪面で、下は洞になつている。雪を支えている這松の枝が太いか細いか、表面からは判らない。だから、細い枝の上とは知らずに差し掛かると、たちまち枝がしなつて雪の層は崩れ、その藪の洞中に転落する。そうなつたら最後、そこから雪原の表面に出るのは至難の技である。上に残された者は、次の崩落を避

けるため、落ちた穴から遠ざからざるをえず、落ちた者は自力で這い上がるしかない。夏でも、一本の這松の根元からその梢に登ることの困難さは、それを経験した者のみぞ知る。ましてこの場合には、スキーと荷物がわが身に付いたままなので、まずそれらを、松の枝に宙ぶらりんにしながら外す必要がある。外して一旦地上に下り立ち、今度はそれを何回にも分けて、雪の穴の外に放り上げる作業になる。そうしてやつとの思いで雪面に這い出ると、全身の力はもう残つておらず、このまま永遠の眠りに就けたらどんなに榮だらう、と願つたくらいであった。しかもこれはほんの一例に過ぎない。このような絶望的な作業を繰り返しながら、知床岬↓知床岳間、直線距離約一三キロ米を踏破するのに、一日も休まずに行動し続けて一三日を要した。前進速度平均一日一キロ米。平地なら歩いて一五分の距離を移動するのに平均一日を要したというこの数字から、この旅の困難さを想像して頂けるであろうか。当初の計画では実働四日と考え、余裕をとつて一〇日分の食料と燃料を持ち上げた。それが一三日になつたのだから、今だつたらマスコミが大騒ぎするところである。後で聞いた話だが、取材同行した毎日新聞社の依田記者は、『恐らく絶望』という第一報を発信しようとしたそうだが、当時の通信事情では、発信は不可能で、お蔭でマスコミから問題にされずに済んだけれども、最悪の登山条件のもとで、下山予定日かとうに過ぎてまだまだ連絡のない我々を、その安否がわからないまま、ただひたすら待ち続

けるしかなかった隊長・故伊藤洋平氏の心労はいかばかりであったか、自分ひとりが生き延びることに精一杯であった我々には、彼の心労を思いやる余裕はなかったし、彼も生前にそれを語ることは全くなかったが、今にして振り返ると、それは想像するに余りある。

先に「一日も休まずに行動して、」と書いた。然り。我々「岬隊」は、船から岬に上陸した瞬間から孤立無援状態に置かれた。この隊は、ひたすら前進して「本隊」に合流するより外に助かる道は無かったのである。来る日も来る日も、視界ゼロの猛吹雪が続いた。常識的には、かかる悪天候下の行動は禁忌である。そして本隊はその常識どおり、そういう日には行動しなかった。しかし我々は、上陸してみても、そんな常識に従って行動していたのでは、一〇日以内に本隊に遭遇出来る確率は殆ど〇%であると悟った。この地獄を抜け出して生き残るには、本隊と合流するしかなく、しかもそれは一日を争う。とてもテントの中でノホホンと天気回復を待つという気分にはなれなかった。とにかく毎日、たとえ少しずつでも前進を続けた。一日の前進距離が推定僅かに二〇〇米という日もあった。前進どころか、一二日目、だだっ広い知床岳北斜面上では、吹雪の中で本隊と行き違いになる危険性が高いことに気付き、その恐れは全く無い前日のキャンプ地のコルまで引き返している。それはいたずらに体力を消耗しただけの徒労の二日間であった。食料と燃料は、計算上一〇日分を持ち上げていた。食料は儉約すれば未だ数日は何とかなるだろ

う。しかし、問題は燃料であった。まずガソリンが尽きた。生存に絶対必要な水は零下三〇度の雪を融かして作らねばならない。零下二〇度の雪を沸騰させるには、〇度の水を沸騰させる倍量の燃料が必要であることを思い出して頂きたい。あとは少量の予備メタノール(註)を残すのみ。火力の劣るメタノールは時間がかかり、熱くなるまでとても待てない。節約のためにも、雪が融けて、少し暖まったらもう火を消してそれを飲んだ。一日のメニューは三枚の乾パンとそのぬるま湯。中に入れる『具』も無くなり、塩と味の素で「お澄まし」を作ってみたが、無い方がまだまし。だから、この二日間の徒労は深刻な心理的ダメージを我々に与えた。夜、「明日は遺書を書こう。」と藤村オンタイは言った。「遺書か、何と書こうか。」「そりやお前、父上・母上、先立つ不幸をお許し下さい、から書き始めるんだ。」と、脇坂ザッカス。そうか、いよいよ死ぬのか。俺は一四歳で海軍兵学校に入った時、あと五年の命、と思いついたことであつたが、それを思えば、あれから七年生きてこられたのだから、まあ、それでよし、とせんか、とは思つたが、死の実感はまだで無かつた。

一三日目の朝、知床岳の方からオーイ・オーイという呼び声が聞こえてきた。助かった！だがここで嬉しがつちやダメだ。はしたない。それよりは、入ってきたところでビツクリさせよう、とオンタイは言うて、呼びかけに応じなかつた。これが彼らに対して如何に残酷な行為であつたかに、全く思い至らな

かつた。「オーイ、生きていたら何か言え！」と殆ど泣き声で寺本巖(シヨーチャン)がテントのファスナーを開けるのももどかしく飛び込んできた。続いて平井・山口・齋藤。そこで一斉に、「腹減つた。乾パン呉れ！」。シヨーチャン、烈火の如く怒つて、「生きとつてナンデ返事せなんだ！俺らどんなに心配してたか、わからんのか！」と、テントの底を叩いてどなつた時に、やつと自分たちの浅はかさに気付いた。申訳ないと思つた。「スマン、スマン」と言いながら、テルモスから注がれた暖かいレモン茶・ミルク茶で、口いっぱい乾パンを胃に流し込んで、やつと心地がついた。思えば、まあこうして助けられたから良かったようなものの、運に見放されておれば、これは遭難必至の無謀登山であつた。

テントはそのままに、身の回り品だけ持つてC2に降り、一休みした後、バテバテになりながら暗くなってやつとC1にたどり着いた。私はその時の記録に、「伊藤隊長がローソクをつけて出迎えてくれた。」と、わざわざそう記載している。

終り

【註】当時の登山用燃料は、ガソリン・ケロシン・米軍放出の携帯燃料(メタノールに凝固剤を混ぜ、ゲル状にして缶詰にしたもの)であつたが、中でも頻用されたのが、この『携燃(ケイネン)』であつた。しかし重くて嵩張るので、メタノールすなわち理科実験用「アルコールランプ」のアルコールそのものを、アルミの水筒に詰めて持つて行つた。

# 剣一周パノラマコース

高尾文雄

はじめに

二〇〇三年に行った剣岳の周りを南から半時計廻りに回り、様々な向きからの剣の写真を撮りながら滑降するパノラマルートをも、今年には雪が多いので少し延ばしてみた。メンバ

## 概要

1は皆年齢とともに体力も衰え、ゆっくりとした山行になった。

【山域】 剣岳周辺

【場所】 富山県

【日時】 五月三日（水）～六日（土）

【メンバー】 高尾文雄、山森晴之、木村哲郎（以上京大山岳部出身）、田中博之（大阪市大山岳部OB）

## 【コース】

三日 室堂～一ノ越～雄山～御前谷～中央山稜  
コル越え～内蔵助平（テント泊）

四日 内蔵助平～ハシゴ谷乗越～剣沢～二股  
～平の池（テント泊）

○池の平山アタック 大滑降

○仙人山アタック 滑降

五日 平の池～池の平小屋～小黒部谷滑降～大窓谷出合

その後二パーティーに分かれる

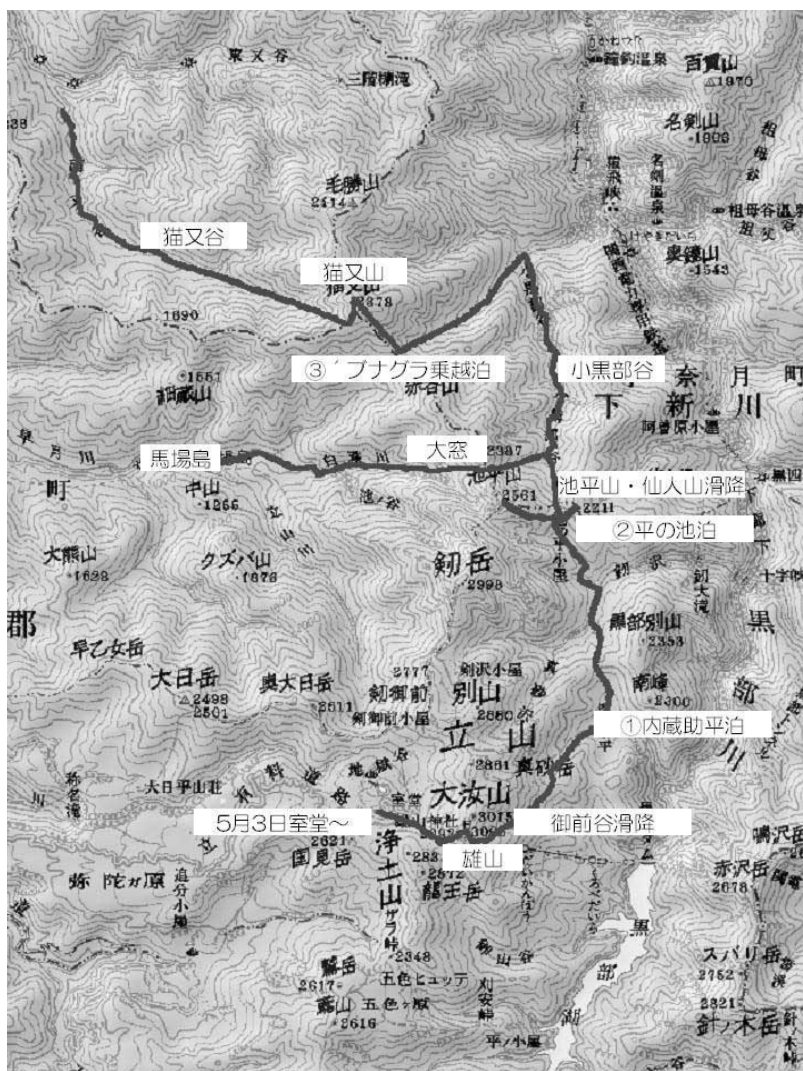
木村、山森  
～大窓～中  
仙人谷～白  
萩川～馬場  
島

高尾、田中  
～小黒部谷  
滑降～折尾  
谷～ブナグ  
ラ乗越（ツ  
エルト泊）

六日 ブナグ  
ラ乗越

～猫又  
山～猫  
又谷～  
南又谷  
～魚津

【装備】 ア  
ルペンス  
キー三名、  
テレマー



御前谷

【装備】 ア  
ルペンス  
キー三名、  
テレマー



池の平山からのチンネ



池の平山を滑る木村

クスキー一名  
報告  
五月三日 快晴  
室堂9:20・一ノ越10:30・雄山12:00～13:00・  
御前谷滑降・立山中央山稜コル14:30・内蔵  
助平15:00  
人ごみの室堂から行列を作つて雄山に登  
る。今年に残雪がたつぷりで、周りの山は四  
月初めのような光景であった。一ノ越からの  
雄山の登りはスキーを担ぎ、あえぎながらの

ゆつくりした歩みとなった。例年は夏道が完  
全に出ているが、雪と氷が沢山残っていた。  
雄山神社におまいりして、剣、大日、薬師、  
笠、黒部五郎、槍穂、針ノ木、赤沢西尾根、  
鹿島槍、白馬の大パノラマを満喫し、ゆつ々  
り休憩した後、神社のすぐ直下から御前谷へ  
スキーで滑り込む。御前谷は広い斜面が黒部  
湖まで続いているが、シュプールが一本も見  
当たらない。最初は急斜面で狭いが雪質は申  
し分なく、快適にターンできる。どんどん滑  
り降りる。大きなターンでスピードを出す。  
とても気持ちが良い。周りはまるでヨーロッ



大窓の登り

パアルプスに居るようだ。岸壁に囲まれたカ  
ールのようなどころだ。  
左に見えてくる中央山稜のコルを目指し斜  
滑降と大きなギルランデを繰り返す。コルの  
すぐ下まで滑り、コルまでシールでひと登り。  
立山中央山稜を登攀するパーティーとすれ違  
う。コルを乗越し反対の内蔵助側に滑り降り、  
内蔵助谷もターンを繰り返す、傾斜が無くな  
り滑らなくなった所でテントを張った。  
無風快晴の中、自分たちだけのシュプール  
を見上げながら雪の上に車座になって飲むお  
酒は最高だった。

五月四日 快晴  
出発7:10・ハシゴ谷乗越8:00・剣沢二股  
8:45・平の池11:10～12:10・池の平山14:00・

平の池15:00～15:15・仙人山16:00・平の池16:45

ハシゴ谷乗越までシールとクトーを使って登り、半分陽が当たった沢を剣沢まで滑り降りた。陽の当たらない部分は硬くクラストしており、滑りにくい。

剣沢は大雪のため二股までほとんど割れていない。二股から三の窓を見上げるとハッ峰とチンネが素晴らしい。二股を小窓雪渓に入り平の池までシールで登るが、周りからのブロック雪崩れが怖い。

平の池にテントを張ったが、ここは別天地である。ハッ峰の展望台で、良い写真が撮れた。景色を堪能した後、池の平山を往復した。標高差五〇〇m。池の平山の東面はスキーで滑るには素晴らしい斜面である。しかもシユプールは見当たらない。頂上からは北方稜線、小窓尾根を登る人が良く見えた。チンネ、ハッ峰もすぐ真横に見え素晴らしい景色であった。

展望を十分に満喫した後、まさに頂上から滑り降りる。途中急なところで重い雪が雪崩れたが、すぐに止まり特に問題は無かった。ほぼ均一な傾斜で広い斜面が続く。大きなパラレルですつ飛ばす。気持ち良かった。あとという間にテントサイトに着き、一休みの後で仙人山へ向かった。

仙人山では黒部側から登ってきた二人組とすれ違った。無木立の斜面にはシユプールは全く無かった。ここも良い滑りができた。

テント地から今滑ったばかりの二山につ

いたシユプールを眺めて皆で悦に入った。

○山森 木村パーティーは  
五月五日 晴れ

出発7:40・池の平小屋7:50・大窓谷出合  
8:30・大窓12:20～40・西仙人谷出合13:40  
(デブリが谷を埋め、スキーを担いで歩く)・1980年ルーム遭難地点14:30・馬場島  
15:15 タクシーで富山へ

池の平小屋からの小黒部谷の滑りは広い急斜面で良さそうに見えたが、雪質が今一で滑りはさえなかつた。大窓谷出合で高尾、田中パーティーと別れた。出合から見上げると、大窓には大きな雪庇が張り出していた。

○高尾、田中パーティーは  
五月五日 晴れ

出発7:40・池の平小屋7:50・大窓谷出合  
8:30・折尾谷出合手前高巻き開始11:30・折尾  
谷右岸台地(ブナ台地) 12:08・ブナグラ乗  
越16:00

大窓谷出合から小黒部谷を下ったが、すぐにデブリが激しくなり、スキーはつまらなくなった。しまいにはスキーを担いで歩く破目になり、時間を食った。

折尾谷が近づくと谷が割れだして、崩壊寸前のスノーブリッジを渡ったり、スキーを担いでの高巻き、へつりなどが連続した。折尾谷出合手前で沢が激しく割れて、つい

に通行不能になりスキーを担いでの高巻きとなった。左岸を七〇mほど上がると段丘となる。大きなブナが生えた平らな台地がありそこを伝って折尾谷へ入った。折尾谷を台地上から眺めると、下流の出合付近の積雪は数年目に来た時よりも少なかった。

折尾谷をブナグラ乗越までシールでひたすら登る。少し風が吹いて暑さをやわらげられた。

ブナグラ乗越で整地してツエルトを張った。夕方、局部的にガスが発生した。

五月六日 晴れ

出発6:30・猫又山10:00・猫又谷下りだし  
12:00・南又谷標高500mスキー終了15:30第二  
発電所まで徒歩。そこからタクシー

猫又山へは最初は夏道通しに行くが、急でスキーは担ぐ。しばらく登ると、尾根が広くなり傾斜も落ちるのでシールで登る。

猫又山から見る剣岳も大変立派で剣尾根が良く見えた。猫又山から折尾谷側に素晴らしい斜面があり、スキーで滑って遊んだ。

猫又谷の入り口に少し迷ったりもしたが、難なく滑り降りた。広い急斜面で気持ちよくターンできた。落石もほとんど無く思い切った飛ばせた。

標高九〇〇m付近で沢が割れだしたので林道に上がって林道を滑り、標高五〇〇m付近でスキーは終了。

ふきのとうを摘みながらタクシーが入れる第二発電所まで歩いた。発電所までの車道の

すぐ脇にカタクリが群生して咲いておりびつくりした。

以上

## 日本オートルート報告

川久保忠通

### プロローグ

今から三〇年以上前の事。働き始めたばかりの職場に、スイスとフランス国境にある「欧州加速器共同機構（通称 セルン）」からきたH.Y.さんがいた。彼は山もスキーも少し素人の域を超えた程度であったが、その当時日本では三大北壁ブームで高田光政さんと山岳同志会の人々が、ヨーロッパアルプスへ行っては彼のお世話になっていてその山行記録には彼の名前が載っており、知る人ぞ知るの有名であった。ある時彼が撮影した「オートルート」の八ミリ映画会が職場であり、それ以来「オートルート」に行くことが僕の夢となった。

その内に日本にも「オートルート」がある事を知り、ここにも是非行ってみたいと思っていた。しかし、「ヨーロッパ・オートルート」ならプロガイドに連れて行ってもらえるだろうが「日本オートルート」は山スキーのエキスパートのみしか許されないコースであろうと思ひ込み、僕にとっては「夢の又夢」であった。

今年三月梅海新道・朝日岳に行った時、風

雪のテントの中で、私が現在所属している山スキークラブである「ラ・ランドネ」の村上さんにGWの予定を聞いたら「今のところ無い」との事。断わられてもともと「日本オートルート」を案内してもらえませんか？」と聞いたところOKの返事。AACKの安仁屋政武さんに声をかけたら、彼とその山仲間二人、それにラ・ランドネの野村さんが参加する事となり計六人のパーティーとなった。

日程 二〇〇六年五月一日（月）～六日（土）  
メンバー 川久保忠通、安仁屋政武、山田、遠藤（以上二名は安仁屋の友人）、村上（L）、野村（以上ランドネ会員） 計六名

### コースタイム

（五月二日）室堂0950～1205……一ノ越1320  
～1336——御山谷登り返し1347……鬼岳肩  
1429——コル1505……獅子岳1557——ザラ峠  
1713……五色ヶ原山荘1823  
（五月三日）五色ヶ原山荘0514……鳶山0551  
～0603——中間コル0634……越中沢岳0749～  
0754……中間コル0941——スズ峠1030～1053  
……スゴ乗越小屋1147……間山1322……北薬  
師岳1523……薬師岳1651～1708——薬師峠  
1746……太郎小屋1811  
（五月四日）太郎小屋0707……北ノ俣岳0905  
～0925——中俣乗越0945～0951……黒部五郎  
岳肩1130～1147——黒部五郎避難小屋1213～  
1303……三俣蓮華岳1515～1535——双六小屋  
1627  
（五月五日）双六小屋0507……樺沢岳0551～



獅子岳頂上からザラ峠への急な下り

0625……コル0644……硫黄乗越0713……千丈  
乗越1010～1030……槍ヶ岳山荘1150～1201……  
……槍ヶ岳山頂1228～1237……槍ヶ岳山荘1336  
～1415——ワサビ沢1709……横尾山荘1735  
（五月六日）横尾山荘0740……明神と徳沢園  
この分岐点0848……上高地バス停1209  
（注）……（シール歩行又はツボ足）登行部分  
——スキー滑降部分

五月一日（月） 上野発二三・五三急行能  
登は、人身事故があり二〇分程遅れて出発し  
た。車内はガラガラで、一人で二人分の座席  
が使える、ゆっくりと寝る事が出来た。

五月二日（火） 定刻五〇分遅れで富山に

着いた。九・五〇室堂着。外は小雨と霧である。「雨が止んでから行きましよう」との村上さんの指示で、待合室でジッと雨の止むのを待ち正午に出発。ガスで何も見えないのがかえって良かったのか、シンドイと思う事もなく一の越に着いた。

小休止後、御山谷方面に滑り出し、竜王岳を右に見ながらトラバース、約二〇〇m下った後鬼岳へ登る斜面でシールとクトーを付ける。竜王岳方面は岩峰が連なり、はなはだアルペンのである。登り詰めると鬼岳のピーク手前が出る。ここでシールを外し、鬼岳のピークを巻きながら獅子岳とのコルを目指す。

獅子岳までは稜線通しである。獅子岳一五〇・五七着。視界が一〇〇m程開けてきた。頂



薬師岳への最後の登り

上直下は急なので横滑りで下ると、急にガスが無くなりザラ峠の向こうに今日の宿泊地である五色ヶ原山荘が見える。傾斜が急で雪面が固く、村上さんは快調に滑っていたけれど、残りの連中は苦勞しながら下って行く。

殆どの人はかなり下まで滑った後、右にトラバースしたが僕は斜面の途中で、斜滑降で峠まで下りるルートを見つけて内心「しめた！」と思った。ところがトラバースの途中部分的に氷状の場所があり、かなり緊張し足にも負担がかかった。

無事ザラ峠着。振り返ると獅子岳からトラバースした我々のシユプールがきれいに見える。ここで又シールを付け本日最後の緩い登りとなる。五色ヶ原山荘一八・二三着。空は完全に晴れ渡り、周囲が一望出来る。静かな夕べである。小屋は雪の穴の中にすっぽりが入っている状態であった。素泊まりだけで食事は出せないとの事で一人五五〇〇円払う。村上さんと僕が持っていたジフィーズで暖かい食事を作り、それに行動食を分け合って夕食とする。

「本日の水平行動距離は7.9km」(注 この距離はGPS (GARMIN社foretrex101) で測定したものです。このGPSは値段の割には素晴らしい機能で、お買い得です。しかし、高度も正確に測定しているのに何故か斜面での移動距離を計算してくれず、水平距離のみ表示します。これが唯一の不満点です。)

五月三日(水) 快晴無風のピカピカの天気である。葛山への緩い登りをゆつくりと登

る。葛山でシールを取り、ちょっと滑ったら雪が着いていない所に出て、しばらくスキーを担いで這松の中を歩く。すぐにスキーを付け右に山を見ながらトラバースしたが、先行した村上さんが待っている地点に着く直前で遠藤さんが二〇mほど滑落して止まった。斜面は急だし、昨日の雨で雪面が固くなっていてかなり恐い場所である。その後ろの野村さんも滑落し、殆ど同じ地点で止まった。

山田・安仁屋さんは何とか行けたが、最後尾の僕は緊張して足がコチコチに固まってしまい、滑り出したら前に滑落した二人の箇所よりずっと手前で滑落し、五m程ずり落ちて止まった。しばらくしてようやく落ち着きを取り戻し、そのまま右に回り込み、緊張しながらトラバースを続けて何とか緩い場所に下りる事が出来た。

振り返ると急な斜面に我々のトラバースの跡が付いている。あのまま下まで滑落したらと思うとゾッとす。

葛山と越中沢岳とのコルでシールを付け、越中沢岳への広大な緩い尾根を登る。頂上近くになると少し稜線が狭くなり、越中沢岳着晴れているが気温が低く雪面は固い。直下は急なので横滑りで下り、その後山を右に見ながらのトラバースで下る。ここから雪がなくなりスキーを担いで夏道の急斜面をコルまで下り、コルから雪が出ているが急登となり、バケツのような足場を、スキーを担いで登る。

スゴ頭の北西側三〇m低地に着き、ここからスキーを履いて滑りスゴ峠に着く。野村さんがスゴ頭のトラバース中一〇〇mほど滑落

して右腕を大きく擦りむいてしまった。ガ―  
ゼで覆って応急手当をする。傾斜はそれ程で  
はなかったが雪面が固いので油断して転ぶと  
なかなか止まらない。振り返ると野村さんの  
転んだ後があり、大事に至らず良かったと思  
う。

木がポツンポツンと生えている緩やかな稜  
線に行く。屋根だけが雪から出ているスゴ乗  
越小屋を通り過ぎ、北薬師岳着。疲れた時の  
心理状態からか手前の小ピークが北薬師で、  
今の地点が薬師岳と思っていたら本当のピー  
クはまだまだ遠くにあつてガツクリする。北  
薬師から少し下った所で、稜線はストーンと落  
ち込んでいる。稜線から一旦逆戻りする方向  
で金作谷側に二〇m程下りた後、反対に向き  
を変え、山を右に見て水平方向にトラバース  
する。傾斜が急なのでかなり緊張した。

ようやく薬師岳に着いた。もう午後五時近  
くである。事前に地図を見た時は下りとはい  
え太郎平小屋まではかなり遠い。又、薬師岳  
からの下りはかなり急であるように見え、疲  
れた体で雪面が固く締まる夕方に無事下れる  
かと不安であつたが実際は傾斜が緩いトラバ  
ースで快適であつた。頂上付近ではところど  
ころ岩が出ていた為スキーの滑降面が傷付い  
てしまった。小屋まで下りだけかと思ってい  
たら薬師峠から高度差にしてあと一〇〇mほ  
ど登らねばならない。シールを付け、ようや  
く太郎小屋着。長い長い一三時間の山行が終  
わった。

「本日の水平行動距離は16.7km」 「本日まで  
の総水平行動距離は24.6km」

五月四日(木) 今日也快晴・無風である。  
昨日と違い今日は大勢の登山客がいる。広々  
とした台地をゆつくりと登り北ノ岳岳着。下  
には有峰湖が美しく輝いている。シールを外  
して滑降準備。赤木岳を右に見ながらの長い  
トラバースの滑りである。あつという間に中  
俣乗越に着く。シールとクトーを付け黒部五  
郎岳の頂上はパスし左側の鞍部を目指して登  
る。上に登るにつれ傾斜が急になって来る。  
鞍部についてカールの下を見ると黒部五郎小  
屋が豆粒のように見える。

カール滑り出しは急でちよつと緊張した  
が、一回ターンを決めてしまえば度胸が付き  
次々にターンして下ることが出来た。カール  
を滑り終えたが、山田さんがなかなか下りて  
来ない。どうしたのかと思っているとやつと  
下つて来た。「思うように滑れない」との事。

もしかしたらスキーの滑降面に雪が付いてい  
るのではとチェックするがOKである。しか  
し遠藤さんが目ざとく、山田さんのクトーが  
下りている事を発見した。このクトーはゲレ  
ンデスキーの流れ止め金具のように予めスキ  
ーに取り付けられており、クトーの付け外し  
にわざわざスキーを脱ぐ必要はなく一八〇度  
の回転でクトーがON/OFF出来る優れも  
のである。しかしよくぞクトーをつけたまま  
でここまで滑つて来たものだと一同感心する。  
正午過ぎ黒部五郎小屋着。避難小屋は使用  
可能で、太郎小屋の弁当と村上さんの作つて  
くれたコーヒーを飲む。

食後、三俣蓮華岳を目指してゆるい傾斜を



縦沢岳からの痩せ尾根

登つて行く。ここから見ると三俣蓮華岳や双  
六岳が屏風のように聳えている。黒部五郎岳  
を振り返ると急峻なカールに我々の付けたシ  
ュプールが輝いて見える。風は微風。最高の  
気分である。三俣蓮華岳着、二〇分ほど休ん  
で、稜線伝いに双六岳方面に向かう。後を振  
り返ると平坦な広い尾根を通つて来た事がよ  
く分かる。ここでシールを取り双六岳を右に  
見ながらトラバースして尾根を右に回り込ん  
だら双六小屋に着いた。

「本日の水平行動距離は17.6km」 「本日まで  
の総水平行動距離は42.2km」

五月五日(金) 縦沢岳の稜線は雪がつい  
ていないが、南斜面をシールとクトーをつけ



て登り縦沢岳着。スキーをリュックに付けアイゼンを履く。

ここから西鎌尾根が延々と続き、その向こうに槍ヶ岳が凜として聳えている。出だしは痩せ尾根の急な下りとなり両方が切れ込んでいく。程なく無事コルの広場に到着。痩せ尾根通過に随分神経を使ったのでコルで小休止。西鎌尾根は標高二七〇〇mの辺りを登ったり下ったりの連続である。稜線は所々雪がなく夏通を歩く。所々岩場のトラバースもある。千丈乗越に着く。この辺りから急激に登り、雪面の斜めトラバースになり、その後直登となる。野村さんは村上さんにアンザイレンしてもらって登る事となり、それ以外の四人は先行する。

正午前、ようやく槍ヶ岳山荘に着いた。すぐに槍ヶ岳頂上を目指して出発する。ルートは登りが左側、下りが右側と別れていて三級の岩場を少し登った後、殆ど垂直の梯子を三回ほど登り頂上に着いた。三六〇度全部見える。下山はどこどころ鎖が埋まっているので、しっかりと手がかりがなく、岩に触りながらアイゼンとスキーストックでバランスを取って下らなければならぬ。

全員山荘に戻り、食堂で一番豪華な食事を取って槍ヶ岳登頂のお祝いをする事になる。しかしながらメニューはカレー（一〇〇〇円）だけであった。これから先は登りはなく、槍沢をスキーで下るだけである。以前この山行を頭の中で思い描いていた時に一番の「至福の時」だと想像していた場面である。ところが滑り出すと雪がネットリと重く、思うよう

なターンが出来ない。数回ターンすると疲れて一休み、なかなか先頭の村上さんが待っている場所に辿り着けない。

やがて傾斜がゆるくなり殆ど直滑降で滑り下りる。赤沢岩小屋辺りから雪面がポコポコになり沢には穴も出て来て滑りづらくなる。その内狭い谷が終わり広い河原状となり、スキーを登高モードにしてクロスカントリースキーの要領で滑らせながら歩いて行った。ワサビ沢を過ぎた辺りでどうとうスキーを諦め担いで歩き出し、横尾山荘着、ゆつくりと風呂に浸かった後、無事に終了した山行を祝ってビールで乾杯する。

【本日の水平行動距離は17.2km】【本日まで  
の総水平行動距離は59.4km】

五月六日（土）ここから上高地まで一kmの標識有り。最初左岸をスキーを付けて滑らせて行つたが、程なく全く雪のない林道に出てこれからはスキーを担いで黙々と歩く。

明神と徳沢園との分岐点に来る。普通なら徳沢園経由で行くのだが土砂崩れで通行止めとの事で梓川を渡って川の右岸を行く事になる。上高地のバス停に着き、僕の夢であった「日本のオートルート」は最高の出来で無事完了した。遠藤さんがタクシーの運転手と交渉して松本駅まで一台一〇〇〇円で行ってもらえる事になった。三人ずつ二台の車に分乗。「スーパード」で一九時頃つくばの自宅に帰り着いた。

【本日の水平行動距離は10.5km】【本日まで  
の総水平行動距離は69.9km】

## エピソード

今年は例年になく雪が多く、荒れた天気が続いて雪崩による遭難が相次いだ為、今回の山行も天候不順で半分くらいまで行けたら御の字かも知れないと思っていた。ところが昼まで雨だった第一日目（五月二日）を除き最終日の五月六日まで申し分のない天気が続いた。その上、このコースを熟知している村上リーダーの名ガイドと、熟年ながら体力・気力・スキー技術共に優れた楽しい仲間恵まれて最高の山行が出来た。

これで長年の夢であった一つの課題が終わった。僕は来年三月末に定年になるが、退職後すぐ「ヨーロッパのオートルート」に行つて次の夢を完成するつもりである。

## 図書紹介

部創設五〇周年記念出版  
京大探検部（一九五六・二〇〇六）

京大探検者の会（編）  
五一頁 新樹社刊

高村奉樹

京都大学探検部は今年三月に創設五〇周年を迎えた。当時山岳部の三回生として探検部創設に立ち会ったひとりとして、あれから既に半世紀経ったかという感慨とともにこの出版を祝いたい。この間に幾多の海外遠征隊を送り出してきたユニークな団体の性格を浮か

び上がらせることを念頭に編集刊行されたという本書の三部からなる内容を紹介すると同時に、「あの頃」を振りかえって少し付言することにしたい。

第一部 探検部の活動を当初から支えてきた顧問の諸先輩が語る探検部。巻頭は本多、瀬戸口らによる「梅棹忠夫インタビュー」探検部設立のころで、梅棹は「戦前からのA A C Kの山の伝統がうまいこと新しい世代に引き継がれていなかった」ことから、探検登山精神の伝承者、組織としての探検部への期待が大きかったことを率直に述べている。川喜田二郎の曾根原、並河との対談はネパール行きのおもいではじまり最近の「没我の文明」への希求でむすばれる。一九五六年初の新学生学術探検隊をひきいてスワートに向った藤田和夫は、当時の思い出とともに隊員本多、吉場を評価している。藤田は梅棹たちとの白頭山周辺の経験に加えて、一九五五年には今西のカラコラム遠征に先輩の松下教授と参加、地質学的に未知のパキスタン北部山岳地域に挑戦していた。今西の要請に応じて、パシフィック大学のベグ教授からは同地域の合同調査の内諾が、その年一月すでに届いており、日本側調査隊の現地入りを待っていたのである。なおこの計画はさらに翌年、松下教授率いるスワート・ヒンズークシ学生探検隊に引き継がれ、これには本多はじめ荻野、岩坪、沖津が参加した。

第二部 本多による「戦後初の学生探検隊はどのようにして成立したか」をはじめ、創設期メンバー沖津文雄の軽自動車による日本

縦走、水軍派を自認する石毛直道のトンガ遠征計画の「正史」ならぬ「野史」、ついで松原正毅の「ボルネオ調査」、吉村文成の「探検部左派といわれて」、瀬戸口烈司の「ニューギニア隊の成立」、山田勇の「東南アジアへの第一歩」、福井勝義の「自分の存在を求めて」あたりが第一世代の記録であろう。つぎに山本紀夫の「アンデスへの道」、安成哲三の「チリ・パタゴニア探検への道」などがつづく。それぞれ計画の立案から遠征隊の実現、成立の経過が詳しく回顧され、時とともに学生による「探検」に生じた微妙な変化が語られる。地域はイラン、ボルネオ、ニューギニアはじめ東南アジア、カナダ、アンデス・パタゴニアそしてアフリカへと広がる。

それぞれが描くユメの実現のために、教授またはしかるべき専門家を取り込んだ。たとえば一九六三年のニューギニア調査は当初からA A C Kの加藤泰安が関わり、今西の指令をうけて山岳部との合同計画として実施された。山岳部O Bの田附たちはスカルノ峰（当時の名称）に登頂したが、瀬戸口は探検部O Bの本多、石毛たちとともに最年少メンバーとして参加した。また一九六八年のチリ・パタゴニア隊はA A C Kの井上治郎とともに、当時松下電子工業に勤務の寺本巖が中島暢太郎隊長の強力な補佐役として参加したことで成立した。また一方では開き直って「わしらは学者ではない。しかしわしらは行動はやめんと」と、梅棹のいう「探検部左派」として振舞った若い人たちの姿があった。いまとなつてはいずれもけなげなものだと思う。ボルネ

オ島の焼畑村、モンゴル研究への苦難の道のり、はいずれも探検部O Gによるもので、女性ならではの視点での調査は、アフリカで活躍する女性研究者を目的の当たりにしてきた私としても頼もしく、たのしい。

なおこの部にある河合雅雄の寄稿「サル学者、吉場健二」は、霊長類学の中堅と目されながら幸島で遭難した若い研究者への心からの追悼文である。かれが二回生のとき、二人で北海道を日高山脈から知床、利尻島と放浪した私にとつて、当時すでにすぐれた博物学者とみえた偉才の早逝が改めて惜しまれる。

第三部 探検部員であったひとびとが、それぞれ現在の立場で、探検部と私 について思いを込めて記している。第二部に続いて、ここに文章を投じたひとたちが研究者、技術者であれ、またジャーナリストであれ、探検部の経験がその後のかれらの研究、仕事に深くつながっていることを強調している。

さて通読して気になるのは、最近探検部で育った人たちの動向が浮かび上がってこないことである。私も幾人か若手の探検部出身の先鋭的研究者を知っている。しかしかれらの「探検」の苦勞話は聞けない。瀬戸口が指摘するように、近年の科学研究費補助によって多くの京大の教官が代表者となり、大学院生を研究協力者として海外に派遣しはじめたことが原因のひとつであろうか。これを「探検」の「野外科学」への内在化とみれば、確かにそれを推進したのが「京大探検部の日本社会における存在意義（瀬戸口）」と言えるだろう。しかしその結果、若い世代の「探検」の

質がかわり、かつてのような個人的で新鮮な経験の報告が見られなくなったとすれば寂しいことである。ただしこれは本書の編集方針によるものであろう、かれらの多彩な海外活動の記録は「いずれ編集されるであろう」「正史」にまつことにしよう。

#### 紹介を終わって—あの頃のこと—

ひとつは探検部創設についての議論である。当時の先輩、特に脇坂、菊池たちが現役だけの遠征に厳しく反対したことは本多の著書に詳細な記録が残されている（本多勝一集四 探検部の誕生 朝日新聞社）。一九五三年秋にアンナプルナIVで厳しい試練に耐えて帰ってきた脇坂には、ヒマラヤはたやすい舞台ではないことが十分わかつていいる。私自身も、かれらを送り出すため、その夏は涸沢合宿から帰って先輩たちと懸命にサポートしたので、当時手作りで本格的な準備をするのは大変なことがわかつていた。しかし本多は軽登山隊を目指すし、また彼の力量ならばそれほど高いところではなければやれるだろう。私は彼の 初めての山 にあるように、南アルプス塩見岳を斎藤Yさんと二人で歩いており、山岳部の平均的なOB以上に山人としての力量を持つことを目の当たりにしていたので、当時山岳部リーダーであった酒井と同様に、かれが加わる現役による海外遠征に同意し、探検部創設に賛成した。

探検的登山の伝承をはかる今西たちが支援する本多に、脇坂が待ったをかけたのは、彼の先輩で先鋭的登山経験をもち三高以外の旧

制高校OBの意向、慎重論が背後にあっただろう。その上に脇坂には次の遠征こそは、後輩を育てて自分たちでという夢があった。

一九五五年の春山、かれが率いてひと月近くかけた極地法による毛勝山から剣岳への縦走はその表われである。余談であるがこの計画とともに苦勞したメンバーの多くが、その後ヒマラヤ遠征に参加しており、このとき酒井とともに登頂者となった高谷は、その後探検部の初代プレジデントを勤めている。

一方では今西はじめ本来のAACK先輩たちの探検部への期待があった。探検講座では桑原、中尾、梅棹といった多くの先輩が熱心にユニークな講義を開陳された。探検部の創設が決まったのはその最終講義日、一九五六年三月二日で、記録写真が本書一〇五頁にある。苦肉というよりも賢明な策、今西による歴史の舵取りの結果であった。

その二週間あと山岳部の春山は三生の私がりーダーとなって島々を経て、雪の上高地にはいり四月はじめまで涸沢をとりまく穂高の稜線を歩いた。上級生の不参加で大きく計画変更を余儀なくされて、前年の秋に槍の肩まで多量に上げた食料のスキーでの荷おろしがまず最初の仕事であった。田附、松浦、岩坪をはじめ、間もなく探検部に移る予定の曾根原、沖津、吉場もみんな機嫌よく参加して、ナダレの危険を避けつつ春の槍沢を登り、穂高の稜線歩きを満喫した。このとき往路の島々郵便局で受け取った本多からの手紙にはパキスタン行き準備がはじまるので参加できない詫びのことがあったと記憶する。間

もなくひと足先に吉場も下山した。いずれ探検部に移るメンバーとの最後の合宿であったが、横尾本谷のベースにはむかし白頭山遠征で今西たちが使ったポータレントを建てた。

なおその後新年度に入って、山岳部、探検部は互いに協力するが、ひとりのメンバーが同時に両部に席をおくことは当然認めない、と合意したことが記録に残っている。

こうして後輩若手に海外探検の道をつけ、AACKにはその二年後の一九五八年の桑原を隊長とするカラコラムのチョゴリザ遠征の実現を推進して、今西は伊谷を伴ってアフリカへと転進する。そのあと山岳部現役も一九六二年インドラサン、六四年ガネシュ（アンナプルナ南峰）と垂直への挑戦を続けると同時に、それらの活動を気象や氷河学、地質学、植物学、高所医学さらに人類学へと発展させ、または転進する努力を払い、探検部出身者とともに野外科学の先端を担っている。

本書を読むとき、この半世紀の国際社会を取り巻く変化が「探検」に与えた影響の大きさに気づくと同時に、わたしたちにはさらに探検を必要とする分野があるという気持ち湧く。

さる三月四日の探検部創設五〇周年記念会では、ふたたび山岳部と探検部の合流を考えてはいかかかという山本紀夫の発言があった。そのあとの祝賀懇談会で発言を求められ私は、ヒトとは何かに深い関心を置いて今後の計画を考えるならばそれも可能でしょうと利いた風な答えをしたことである。

## 図書紹介

### 「快樂登山のすすめ」

(原眞著 一九九九年四月一九日二  
版発行、東京新聞出版局発行、一七  
〇〇円)

阪本公一

私の敬愛する名古屋の登山家原眞は、登山界では毒舌家と言われている。日本の登山界では、他人に嫌われないように、あたりさわりのない本音にふれない登山論を展開する有名登山家が多い。原眞は、日本、ヒマラヤ、パミール、アンデス等で自ら実践した数多くの厳しい登山経験に基づいて、山登りについての彼の真摯な登山理論を、自らの責任において堂々と展開する。そんな飾り気のないストリートな彼が、私は大変好きだ。「快樂登山のすすめ」は、真に山登りを目指す者をわくわくさせるような本であり、そして私たちに「山登りとはなにか」を考えさせる本である。

同書の「百名山ごっこは特許侵害」という章にて、原眞は次のように述べている。

『日本人には自主性に乏しい集団依存型の人たちが多いように思えてならない。彼らは、戦前には日本軍国主義の犠牲となり、戦後は経済万能主義の僕となった。戦前の日本人は大日本帝国がなした侵略の手先となって戦地

に送られた兵士であり、敗戦後の彼らはまっ黒になって働く会社人間であった。そこに自分を殺し、国家と会社に盲従してきた人たちが多い。この日本人の汗によって、日本の自然は平野ではみる影もなく破壊され、都市も郊外も日ごとに人工の醜悪を強めつつある。彼らが定年をむかえたあとに、大挙して山へ押しかける気持ちはわからぬでもない。失われた青春は、結局、昔と変わらぬ自然のなかにしか残っておらず、日本の海岸の大半がセメントで固められてしまった以上、自然はわずか山のなかにしか残っていないからだ。そこで、彼らは山へ登るわけだが、その登り方が自主性に欠けやすく、道具や案内書に頼りすぎ、登山者目当ての商人たちによって食い物にされている。山登りは、「最少の道具」と「できるだけの粗食」と「ガイドおよびガイドブックおよび観光バスなし」をもってよしとする。すでに、戦前戦後と二度の犠牲を払ったのだから、三度目に「百名山ごっこ」の犠牲者になってもらいたくないというのが私の切なる願いである。以上を書き終わって、三日目に、夢のなかで深田さんの来訪を受けた。「原君、僕はまだ生きているんだよ」と深田さんは、懐かしい声でいった。深田さんはこの世にやり残したことが多すぎて、まだ成仏していないのかもしれない。』

原眞は、自主性のある自らの意志に基づいた山登りをすべきと「自分本位の山」という章で次のように力説する。

『山はもう少しすなおに登ったほうがよい。

大切なのは、「面白さ」のほうであって、大義名分ではない。山登りは面白いからやる。それでいいだろう。むずかしくいったとしても、せいぜい生命力を喚起するため、ぐらいでよい。面白いとは、いきいきとした感情を得られるということの別名なのだ。そうでない山登りは、すべてくだらない。

面白い山登りをやるための第一条件は、「自分本位」になることだろう。「他人本位」の山登りではちっとも面白くないということには、まだ社会通念になっていない。日本人が、山に限らず一般に物事を楽しむ能力に欠けているのは、他人本位だからである。封建時代の遺風が残っているお国柄といってよい。この遺風を打ち破らなければ、面白い登山はできない。

自分本位の人間というのは、自分の考えをもっている・・すくなくとも、もとうとして他人の考えを尊重する能力をもっているから、たがいに協力しあえる。一方、他人本位の人間というのは、自分の考えをもっていない・・またはもとうとしない・・人間のことである。この種の前時代に属する人間たちは、自分が考えをもたないのとおなじに、他人の考えをもつべきでないと思っている。こういう人間たちには、集団に対する従属や支配（おなじものである）の感情はあるが、個人としての自己表現の精神にとぼしい。彼らは、他人の犠牲になるかたわら、自分でも他人を犠牲にして生きていこうとする。

他人本位の人間は、山登りを楽しむ自己能

力にとぼしいから、とかく売名のための登山や山の政治などをやりたがる。この場合の政治は代償行為のことだから、人民のためになる本当の意味の次元の高い政治ではない。一種の、無原則人間という意味での政治的人間である。日本は、いままでは政治家不在の国だった。登山界は、その最も典型的な例でもある。

自分本位の山登りをやるためには、まず他人本位の人間を自分の周囲から排除しなければならぬ。すくなくとも、他人本位の人間たちの犠牲にならないよう細心の注意が必要で、これは相当の経験と知識と勇気がいる。』

原眞は、楽しい山登りをするための具体的な方法を、序章の「快樂登山のすすめ」で次のように解りやすく説明する。

『登山者は、自分の体力に応じて、快感の誘発に最も役立つあたりに苦痛の量を調節すればよいことになる。苦痛のみを求めるのではなく、苦しみと同等の快樂を得られるような自分の歩行速度を発見する必要がある。おおむね、ゆっくり登れば、苦痛は減り快感がます。』

十分に深い腹式(丹田)呼吸をしながら、狭い歩幅で、短いやすみをとりつつ適切な速度を維持して登りつづけると、一步一步が気分のおい快感登山につながる。・・・

世の中には競走馬のような登山者もいて、一緒に山に登れば、必ず競争意識をむき出してスピードをあげる。登山には「速くの登つ

て速く下つてくるのが安全」という原則はあるものの、速く登ること自体が登山の目的ではない。時間記録だけを求めはじめると登山家の精神は墮落する。自分のペースを発見し、快樂登山へもつてゆくことが、あくまでも大切。』

原眞の「快樂登山のすすめ」を読んで感銘を受けた方には、原眞の海外登山の軌跡といえる「還らざる者たち(悠々社)発行、二五〇〇円」、そしてヒマラヤ等高山登山を目指す人々には「ヒマラヤ・サバイバル(悠々社発行、二五〇〇円)」を御紹介したい。

## 事務局報告

### 【理事会決議録】

日時 平成一八年五月一四日(日)

午後一時～午後二時二〇分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館一

〇二号室

### 出席理事

木村雅昭 福寫義宏 田中昌二郎 松林公藏

永田龍 吹田啓一郎 竹田晋也 山田和人

以上八名

### 委任状によるもの

上田豊 前田栄三 横山宏太郎 松沢哲郎

牛田一成 中川潔 人見五郎 高尾文雄 小

林尚礼 以上九名

### 欠席理事

なし 以上二名

### 議事の経過および結果

会長木村雅昭が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

### 第一号議案

平成一七年度事業報告について

理事吹田啓一郎により平成一七年度事業報告が説明され、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

### 第二号議案

平成一七年度収支決算について

理事竹田晋也により平成一七年度収支決算が説明され、逐一審議の結果、満場一致で承認した。

### 第三号議案

新入会員について

担当者より下記二名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

上久保達夫、藤澤澤子

### 第四号議案

明永村記念事業について

第二次梅里雪山隊の搜索現場にある中国雲南省の明永村で、搜索活動への協力を記念する事業を実施するために下記五人の会員による明永村記念事業委員会を設け、その活動費として特別会計遠征基金の調査補助金から二〇

○万円を充てることについて提案があり、満場一致で承認した。

委員長 左右田健次

委員 岩坪五郎、中川潔、小林尚礼、伊藤宏範

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

#### 【総会決議録】

日時 平成一八年五月一四日（日）

午後三時～午後四時一五分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会館一〇二号室

正会員の総数 二五九名

出席者数 一五三名（うち委任状出席二二一名）

#### 議事の経過および結果

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）木村雅昭が定款の規定により議長となり、下記議案の審議に入った。

#### 第一号議案

平成一七年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成一七年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

果、満場一致でこれを承認可決した。

#### 第二号議案

平成一八年度事業計画および収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。平成一八年度から実施される新会計基準に則った予算計画書の内容について旧表記との違いについて質問があり、担当者から説明がされた。また、中国雲南省の明永村記念事業に特別会計遠征基金から調査補助金二〇〇万円を充当し、事業の執行は明永村記念事業委員会（委員長…会員左右田健次）に一任する事を承認した。

#### 第三号議案

新入会員について

平成一七年三月二一日ならびに平成一八年五月一四日開催の理事会において承認を得た下記三名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

川久保忠通、上久保達夫、藤澤道子

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後四時三〇分議長は閉会を宣し解散した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人において次のとおり署名押印する。

#### 【会員名簿に関するおことわり】

会員名簿の発行は毎年としていたのを昨年より隔年に変更しました。今年も名簿を発行

しない年に当たりますので、会員の皆さまにはご了承くださいませよう、お願いします。

事務局長 吹田啓一郎

## 会員動向

### 新入会員

## お知らせ

左記の要領で日本山岳会の講演会が開催されます。講演者は松林公蔵会員です。

時宜を得た演題であり、参加は限定されていません。日本山岳会会員以外の方もお誘い合わせ多数ご参加下さいとのことでした。

なお、参加申込は、葉書、ファックス、メールにて後述の宛先までお願いします。以上お知らせいたします。

(田中昌二郎)

## 日本山岳会医療委員会 関西講演会のご案内

医療委員会では安全な登山を目指して講演会を東京で行ってまいりましたが、地方でも開催してほしいとの希望にお答えして、今回、京都で講演会を行うことにしました。皆様、是非ご参加ください。

講演者 松林公藏氏（京都大学東南アジア研

究所 フィールド医学）

日時 二〇〇六年九月五日（火）

一八時半～二〇時半

場所 京大会館（電話075-751-8311）

・京都駅より市バスD2のりば（二

〇六）「京大正門前」下車

・三条京阪より京都バス一七番のり

ば出町柳經由系統「荒神橋」下車

・京阪電車「丸太町駅」下車徒歩七

分

定員 一〇〇名

参加費 無料

お申し込み

メール jacnlned@yahoo.co.jp

ファックス

03-3261-4441

葉書

〒102-0081 東京都千代田区四番町五・一  
日本山岳会医療委員会

締め切り

八月二十五日

世話人 日本山岳会医療委員会

野口いづみ、貫田宗男

以上

## 編集後記

□アフリカ縦断の旅もいよいよ佳境に入ってきました。同じ大陸の中で隣り合っていますが、

そこで住む人々の暮らしが極端に違っている様や、車の故障、ガソリン危機など次々と起こる難題を、経験と知恵を駆使して乗り切っていく様子が興味津々です。次号をお楽しみに。

□「人物抄」は、登山史の表の部分と、われわれが知らないインサイドストーリーとを両方教えていただいています。今回、奥貞雄さんのヨーロッパ遊学時代、スイスカの山小屋をバックに悠然と寛いでおられる雰囲気抜群の写真が、画質が不十分のため、掲載を見送らざるを得なかったことは、残念でなりません。

□中島道郎会員から、五三年経ってもまだあのつらさは忘れられないと、知床岬隊の厳しさを生々しくご執筆いただき、ご寄稿いただきました。ありがとうございます。

なお、「今ここで言っておこう」、「今だから話そう」など、会員の皆様がかねて胸に暖めておられる挿話を、この機会にニュースレターにご寄稿いただけたらと思います。どうかよろしくお願い致します。

□今シーズンの豊富な残雪量を生かし、過去のラウンド剣のルートを更に猫又山まで延伸した豪快な山スキー報告を、高尾文雄会員から報告いただきました。チンネをバックに滑降する写真は圧巻です。

□「日本オートルート」の執筆者川久保忠通会員は、二〇〇六年三月入会された新入会員です。従来から意欲的に山行をかさねておられ、このたび日本オートルートに挑戦されたのを聞き、新入会員がと再三辞退されたのを、

いや新入会の機会に是非元氣な山行報告を、と、まげてご執筆いただきました。

新入会員の方々には、折角ご入会いただいたことでもあり、今後ニュースレターへ順次執筆をお願いしてゆきたいと思っています。山行報告に限定せず、題材、分野は広く考えていただき、よろしくお願い致します。

（なお、日本オートルートと言っても各自の好みもありいろいろなルートが選定されています。今回は、高尾文雄会員がAACK Newsletter No.18 (October 2000) に「山岳研究―新日本オートルート」として発表されたルートとは違う、独自のルートを採用しております。）

□誠に勝手ながら編集子の個人的都合により、次号原稿締切り日を一〇月末日、発行予定を一〇月末日に変更させていただきました。何卒よろしくお願い致します。

田中昌二郎

編集委員

発行日

発行所

製 作

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

京都市北区小山西花池町一―八

(株) 土倉事務所